北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1999.4.1

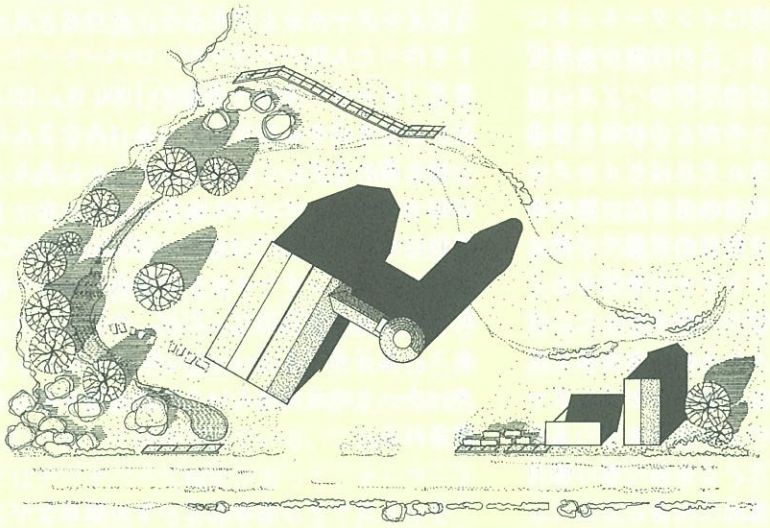
第21巻1号

通巻149号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

サイロの風景…上

カットと文　須田邦昭



牧舎を傍らにしてそびえ立つサイロの風景がある。塔状の姿のサイロが緑の草原に点在する遠景は、そのまま「北海道を象徴する風物詩（北海道大百科事典：北海道新聞社編）」となる。風と雲、それに子山羊のなき聲、乳牛の群れ、それらのすべてが山麓に穏やかな時を刻んで流れて行く。サイロの簡潔な形態が、あたかもその水平な動きの中に打ち込まれた楔のように直立する。北海道の牧歌的な風景の構図はこのように描けるであろう。

北海道のサイロは、周知の通り明治30年代後半から大正期にかけて札幌を中心に登場した。「サイロの風景」は北海道の現在の風景のひとつであると同時に、戦後に続く開拓とその生活風景を想起させる記号的な存在でもある、と言える。

我々北海道民はこの「サイロの風景」に、厳しい風土に耐えつつ今日を可能にした、言わば先人達の暮らしの証しを見る。その「空へそびえ立つ簡潔な垂直性」に、「力強さ」や「荒野に戦いを挑む青年の頼もしさ」を想う。それは、取り敢えず、開拓者精神のひとつの具現であろう。開拓の時代を生きた群像のひとつの影であろう。

我々は「サイロの風景」をためらわず肯定することができる。その時この風景は、過酷さ、困難さに向かって挑んでいく、「躊躇なく進取する強いもの」を表象しているかのようである。

ところが、別の見方もありそうである。「サイロの風景」を否定的に受け止めるのである。武田泰淳の小説「サイロのほとりにて」に、そのような観賞態度が可能なことを思った。「躊躇なく進取する強いもの」との対比で言うなら、「サイロの風景」は「趣と調和を欠いて盲進するもの」の表象でもありうるのではないか、ということである。〈続く〉

（すだ　くにあき　工学部教授　建築計画・意匠）

■ p.2-3. **インターネット時代の情報リテラシー**（杉本英二）■ p.4-5. **部屋拝見①ロシア研究愛好会**
■ p.6. **留学生活印象記**（李南南）■ p.7. **投機とバブル**（小林真之）■ p.8. 日本語ルーツ東西探訪（その1）

インターネット時代の情報リテラシー

杉本英二

すべての小・中学校にパソコンを備えるというこれまでの国の政策が、今度はインターネットに接続するという政策に変わる。この政策が今年度の予算から始まる。「ほとんどの学校のパソコンは死んでいるのも同然」というのがこの政策を推進している郵政省の認識である。それほどインターネットを使った教育が重要視されてきた。昨年本学3年生向けのコンピュータ科目の授業で「教えてもらいたいことは？」とアンケートを採ると、「インターネット」という希望が一番多かった。中でも「インターネットでおもしろいことを教えてください」には驚かされたが、学生たちがインターネット・サーフィンも授業の1つと考えていることが分かって、興味深かった。こうした強い魅力がインターネットの普及を支えている。

振り返ってみれば、コンピュータ・リテラシーあるいは情報リテラシーがマスコミで見受けられるようになったのは、1980年代後半である。特に1986年の臨時教育審議会から「情報関係学部・学科以外の学生に対する情報教育を広げるべき」との答申が出されてから、文部省の取り組みが始まった。目標は「高度情報化社会をにらんだ措置で、社会に出てコンピュータ・アレルギーにかからないようにすること」だった。当時の産業界が企業内の情報化に向けてコンピュータ・アレルギーに苦慮していた姿が推測される。たとえば北海道新聞社が紙面作成を電子化する際に、「ワープロを使いたくない記者に使わない自由も認めよ」という要求が労使の間で話し合われたと聞いている。今では昔のことであるが、まだ10年を経過していない。

現在、経済学部のコンピュータ科目で楽しく受講する学生たちの姿を見ると、「コンピュータ・アレルギー除去」という文部省・産業界が期待していた目標が達成されたといえようか。しかし功績の多くは、学生たちのアンケートに表れているようにインターネットであろう。そのインターネットを作った人間のドラマが、ロバート・リードの著書『インターネット激動の1000日』（日経BP社）に生き活きと描かれている（みなさんにもご一読を薦めます）。この本のタイトルにあるように1993年からたった1000日でインターネットが爆発的に成長し、現在なお激しく成長し続けている。これまでのインターネットは個人的あるいは世界的な情報発信が目的だったが、今後は、e－ビジネス、電子商取引などに代表されるようなインターネットの産業化という傾向が強まるものと予想される。

ネットワークに参加していない孤独なパソコンはスタンドアローンと呼ばれる。そういう状態でのコンピュータ教育は、基本的にコンピュータ操作方法が中心だった。かつてはプログラミング以外に教えるものが無かったが、80年代末にはワープロや表計算ソフトが加わった。この時代は、いかにパソコンを使いこなすかというコンピュータ・リテラシーの時代であった。しかし、パソコンがインターネットに接続されると、状況が一変した。WWW(World Wide Web)では、キーボード操作を必要としない。マウスのクリックだけで足りる。となるとパソコンの操作方法を中心に進めていた授業は困った。教えるものが無いのである。学生の「インターネットでおもしろいことを教えてください」というのは、もっともな要求と思われる。ここでは、インターネットという大規模な情報の海とどう向き合うかが問われている。

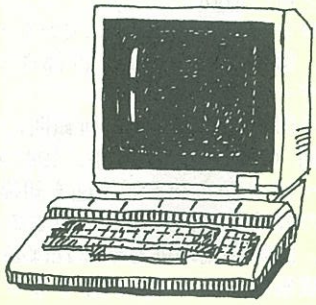
さて、その情報リテラシーのモデルの1つが、立花隆の『インターネットはグローバル・ブレイン』（講談社）である。これはインターネットには大量の情報があるが、必要な情報は少ないというクリフォード・ストールの『インターネットはか

らっぽの洞窟』対して、確かに無意味なものが多いけれど考えるための材料はいくらでも収集可能だと、インターネットを探索して、サイエンス、ニュース、博物館、映画、アダルト、殺人、テロ等々様々なジャンルから現代社会を描き出している。こうした問題にどのように関わるのか、混乱する情報の中で真実を嗅ぎ分ける思考方法が必要である。立花の本は、インターネット・サーフィンを始める前に読んでおくべき本の１つである。

インターネットは書籍との関わりが大きい。インターネットの仕掛け人の一人がアマゾン・コム(http://www.amazon.com/)である。300万冊にもおよぶ膨大な数の書籍カタログを持つインターネット仮想書店の老舗である。日本でも、紀伊国屋書店、丸善、図書館流通センター、古書では本の街神田(http://www.book-kanada.or.jp/)など様々なインターネット書店がある。これらは、津野海太郎編『徹底活用「オンライン書店」の誘惑』(晶文社)で詳しく紹介されている。これらの仮想書店にはデータベース検索があって、キーワードを入力すると関連する書籍を出してくれるので、買わなくても調べものに役立てることができる。アマゾンのような店舗になると、売れ筋情報も掲載しているので、カレントな話題が得られる。またインターネットでは、大学の先生たちの論文も調べることができる。学術情報センターの学術雑誌目次速報データベース(http://www.nacsis.ac.jp/sokuho/index.html)である。そのページに参加機関別リストがある。国立大学、公立大学、私立大学などの分類を選ぶと大学のリストが出てくる。そこで調べたい大学をクリックすれば所蔵されている雑誌目録が出る。各雑誌ごとに論文の著者とタイトルが出るが、北海学園大学の場合は所蔵されている雑誌名のみである。他に人名から著書・論文を検索するサービスなどもある。学術情報センターとは別に、図書館のサービスをインターネットで公開している大学が多い。そのサービスの１つが図書検索である。書店にはない古い本でも遡って検索してくれるので、有益である。これらの情報を使って、大学ごとに比較すると図書の充実度合いが把握できる点も興味深い。

出版に関しては、インターネットによる電子出版がある。電子出版は、タイトル以外に本文も読むことができる点で、前項の情報検索より進んだサービスである。立花の本でオックスフォード大学の仮想図書館が紹介されているが、日本でも京都大学の電子図書館実験システムがある。北海道大学では学内ネットワークに限定されているが、特定の雑誌に限って内容を読むことができる。刻々と情報が増えていく先端の研究分野では、リアルタイムに大量の論文の中から必要な論文を検索し、直ちに読むことができる電子出版が期待されている。将来こうした電子出版が普及すると、本の所蔵が目的の図書館が大きく変わるかもしれない。一方、仲間たちの情報交換としてのWWWによる電子出版はかなり多い。私はフリーソフトを使っているが、その関連ソフトのマニュアルをインターネット検索で手に入れることができた。インターネットの場合はほとんどが無料である。お金をかけず必要なときにいつでも情報が得られるのはありがたい。最近Linuxという PC-UNIXのフリーソフトが流行しそうだ。こうした有用なソフトさえも無料でダウンロードできるインターネット時代を支えているボランティア・グループには敬意を払いたいと思う。

(すぎもと　えいじ　経済学部教授・経営統計学)



部屋拝見①

ロシア研究愛好会

ロシア研究愛好会６代目会長　小田島誠貴（経済学部３年）
４代目会長　並河　一久（法学部平成11年卒）

ロシア研究愛好会誕生秘話

ロシア研究愛好会（通称ロシ研）は、ロシア語学習を通じて、ロシアの文化・歴史等をもっと知りたいと思う者が集うサークルである。ロシ研の歴史は1994年３月31日に遡る。公式文書ではこの日にロシ研が結成されたことになっている。だが、この日にロシ研結成決起集会など行われた証拠資料はない。実際この日に行われたのは、第１回ロシア留学参加希望者のための打ち合わせ会だった。ここで結成されたのは、ロシ研ではなく第１回ロシア語ロシア文化研究調査派遣団だった。それでは、これは歴史の改竄?!　いや、そうとも言えない。

第１回留学は1994年夏に14名の参加のもと行われた。帰国後、参加者の内13名[1]が集まり、自然に出来上がったのがロシ研なのである。いつ出来たのかハッキリしない。ハッキリしないついでに、このメンバーが最初に集まった日（1994年３月31日）をロシ研の結成日としたのである。

ナターシャ先生とともに
（第１回留学参加者＝ロシ研発足メンバー、左端にユーリー先生も）

ロシ研の活動

ロシ研の活動として、次の１～８があげられる。

１．留学：約５週間、古都ヴラヂーミルのヴラヂーミル大学

寺田吉孝先生（ロシ研顧問）引率のもと、過去３回（1994年、1995年、1997年）行われ、各回14～16名からなる派遣団を組織している。この留学の経験者は、外国人に対しての気後れがなくなり、国際交流の催しがあれば必ず参加するといった積極性が出てくる。「下手なロシア語でも英語でも、その気になれば、外国人とコミュニケーションが出来る」といった図太さが養われるのである。ロシ研の歴代会長に外国人の彼女がいる者が多い理由も分かる（初代会長→ロシア、ラトヴィア；２代目会長→ロシア；３代目会長→タイ、フィリピン）。

現地で知り合うロシア人、特にヴラヂーミル大学の先生方、寮職員の方々、旅行先[2]でお世話になる方々など、みんな本当に親切である。普段何かとイメージの悪いロシア人であるが、そのイメージを吹き飛ばしてくれる。

約１カ月のサハリン留学（1996年春）が行われたこともあった。宮北桂至氏[3]（当時法学部１年生）を団長とする８名の派遣団であった。さらに、ヴラヂーミル大学への長期留学者も５名出ている。

ヴラヂーミル市の中心地

２．ボランティア組織「チェルノブイリへのかけはし」の保養里親運動への参加

この組織は、チェルノブイリ原発事故で被曝したベラルーシの子供達を毎年夏１～３カ月間、保養のため里子として世話している。1996年からロシ研はこの活動にインチキ通訳兼遊び相手として参加している。ベラルーシの国語ベラルーシ語がロシア語に似た言語で、ベラルーシの殆どの人がロシア語も使えるので、我々はロシア語で意思疎通をはかっている。現地の雰囲気をいっぱい漂わせているベラルーシの子供達とのふれ合いは、国際交流の実践の場として貴重な体験を与えてくれている。

ベラルーシの子供達とともに

3．各種勉強会

検定試験対策勉強会、会話教室、超初級講座、ロシア人向け日本語教室、ちょっと中級講座等が行われてきた。最近は、輪読会（新聞、ロシア語版のエッチ本）が催されている。

4．機関誌の発行

1995年3月に「**Месяц в России**（ロシアでのひと月）」が発行された。これは、ハイパーインフレまっただ中の1994年夏の第1回留学参加者の貴重な体験記である。ロシ研機関誌の創刊準備号でもある。1996年12月に待望の機関誌「**Нормально** ナルマーリナ（『ぼちぼちでんな』の意味）が創刊され、1998年3月には第2号が発行された。創刊準備号は在庫切れ、創刊号と第2号は残部あり。興味のある方は、ロシ研の部室（文化棟4F）か顧問の寺田先生の研究室（研究棟5F）まで。

5．弁論大会参加

参加意欲は旺盛なのだが、ロシア語力が伴わず、これまでに3名しか出場していない。今後は積極的に参加していきたい。

6．ロシア人狩り

札幌在住のロシア人を捜し出し、お友達になること。留学で鍛えた図々しさがここで生きる。

7．コンパ、合宿、花見

コンパは、数限りなく行ってきたが、1998年度より合宿が催されることになった。中国語研究会に負けず、合宿で倒れるまで勉強するぞ。

8．その他

さっぽろ雪まつりのボランティア通訳、札幌で治療を受けていたサハリン地震被災者のお世話などいろいろ。

ロシ研の運営と今後の活動

ロシ研は今年の春6年目を迎えた。一時は部員激減で危機的状態だったが、現在は部員約30名、活動も順調である。1998年秋には2部ロシア語研究愛好会が誕生した。共同事業の計画も進んでいる。

ロシ研の雰囲気は、無政府状態のカオスそのもの。統制のとれていない野放し状態。言いたい放題。しかし、一度、活動方針が決まれば、協力しあって行動する絶妙の息。今年の夏には、第4回留学が行われる。どんな留学になるか楽しみである。機関誌第3号も1999年度内に発行予定である。

これまでのロシ研は、寺田先生をはじめとする顧問の先生方に頼る傾向があったが、今後は、頼るのでなく、要所要所で指導をあおぐ（悪い言葉で言えば、利用する）ようにしていきたい。どっちみちお世話になることには変わりないが。

新入生諸君、ロシ研には十分ご注意いただきたい。**Пока！** パカー（じゃねー）

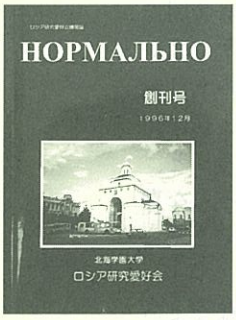
注

(1) 残りの1名(安木和子氏、法学部卒業生)は、1994年の第1回留学の時から現在に至るまでずっとロシアに滞在し勉強している。ロシ研特派員としても活躍。

(2) ヴラヂーミルを離れ、モスクワ、St.ペテルブルグ、コストロマー、スーズダリなどへ旅行を企てるが、いつも宿泊は寺田先生の知り合いのロシア人家庭である。

(3) 宮北桂至氏は、高校卒業後サハリンに渡り、約2年間ユジノサハリンスク教育大学で学んだ経歴がある。

創刊準備号



創刊号

第2号

留学生活印象記

私が見た札幌の人々

李　南南

３年前の４月４日に、言葉で表すことの出来ない複雑な心境をもって、私は一人で故郷（中国・吉林）から札幌にきた。その時から、私にとって、予想もしなかった留学生活が始まった。

札幌に初めてきた時、この街に対する私の印象はよくなかった。当時、ちょうど、雪解けで道の悪い時期だった。連日の長雨で、太陽がときどき顔を出す。気分は重苦しかった。さらに、私はそのとき日本語をはなせなかった。誰も知らなかったので友達がいなかった。孤島にいる感じがあった。そして、この街に住んでいる人々が冷たいと思った。故郷の清々しい空気と明るく輝く青い空を特に思いだした。

月日のたつのは速いもので、札幌の留学生活の３年間は、あっという間に過ぎてしまった。この３年間に、私はいろいろな事をたくさん経験した。それぞれの事を通して、私の最初の札幌と札幌の人々について感じていた印象は変わった。この感情の変化は突然発生したのではなくて、時間が推移するにつれ、札幌の人々とのふれあいが深まるにつれて、生まれた。

私は最初日本の日常生活について知識をまったくもっていなかった。大変困ったと思う。壁一つ隔てた隣に住んでいるおばあさんは、いろいろな事を私に辛抱強く与えてくれた。ときどき自分が得意な日本料理を私にわざわざ作ってくれた。とてもやさしいおばあさんです。

最初、日本語が通じなかったので、私は藤岡先生について日本語を勉強した。先生は五十音図から私の日本語の発音を直してくれた。その上日本の文化、歴史、経済、社会などに関して、私に知識を教えてくれた。どんな悪い天気であろうと、先生はいつも大学で私に教えてくれた。そんな真剣な態度に直面して、私は大変申し訳ないと思った。とてもとてもいい先生です。

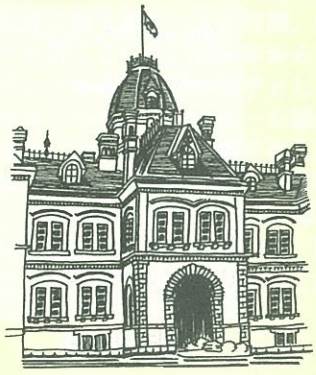
私がアルバイトをした喫茶店でも、同様なよい人に出会った。私はその仕事を初めてした時、なにもできなかったから、みんなは私に手を取って教えてくれた。店長はわざわざ「日中辞書」を買ってきて、特別なメニュー（料理の名、値段、使う食器と読み方などを一つ一つ明記してあった）を書いてくれ、暇な時に私に日本語を教えてくれた。それで１カ月後の私は、店内の仕事がすべてできるようになった。みんなは私を頭がいいと誉めてくれた。でも、私はよく知っている、みなさんの助けがなかったら、私はきっと直ぐに辞めてしまっただろうと。

このような多くの事をとおして、札幌人の温かさを私は身にしみて感じた、私は札幌の人々の心がわかった。この街の人たちは私の故郷の人々と同じ人間である。交流は理解の橋である。３年間の留学生活は私に多くの事を教えてくれた。私はこの３年間の留学生活に感謝している。特に、私に愛と勇気を与えてくれた善良な札幌の人々に感謝している。

３年間が過ぎ去る。来年の今頃、私は札幌と離れるかもしれません。しかし、どこにいても、この３年間の留学生活が忘れられない、札幌が忘れられない、札幌の人々も忘れられない。永遠に忘れない。

私が見た札幌は大好き、私が見た札幌の人々は大好き。

（リ　ナンナン　経済学部研究科大学院修士課程）



投機とバブル

――1929年株式恐慌の教訓――

小林真之

権力・名誉・金銭等に対する人間の欲望は限りがなく、人類の歴史を演出してきた原動力といえる。英国の名門マーチャント・バンカーであるベアリング商会、ノーベル経済賞の価値を低下させた大型ヘッジ・ファンド（LTCM）の破綻は人間の金銭欲を追求する現代の投機を象徴する事例であり、投機を規制すべきとの声が大きくなっている。だが投機の歴史は古く、投機は経済の不可欠の部分として組み込まれているのが現状である。

オランダといえば〝風車とチューリップ〟を思い浮かべる人が多いだろう。チューリップがトルコからオランダにもたらされたのは16世紀半ばであり、美しく、稀少な品種の球根が高く評価されるようになると、栽培のためではなく、転売して儲けるために球根の売買が活発化してくる。1630年代にはヨーロッパ中の富がオランダのチューリップ市場に殺到したといわれるほどユーフオリアが絶頂に達し、球根に法外な値段がつけられたが、さしもの熱狂も1637年に崩壊し、借金で球根を売買していた多くの大商人・貴族が破産に追い込まれている。これが世上有名なチューリップ恐慌であり、人間の肥大化した欲望が社会を揺るがす規模にまで発展した出来事であった。

投機の対象としては価格変動が激しく、かつ騰落の見通しが困難な商品が望ましい。その条件を最も満足させるものは、価値を容易に判断することが難しい古本、美術骨董品、土地、為替、証券などであり、歴史上有名なバブルは土地、株式をめぐって起きているのも故なしとしない。1920年代のアメリカの株式ブームとその崩壊は私たちが知るバブルの最たるものといえる。株価の下落は29年10月～32年6月まで89%に及んでおり、日本のバブル崩壊後の株価下落（67%）と比較すれば、その規模を推測できるであろう。20年代のアメリカは自動車・家電製品（ラジオ・掃除機・冷蔵庫）の耐久消費財が家庭に普及し、アメリカ的生活様式が確立されていった時期である。株式市場には新興産業の成長株が多数上場され、また富裕階層と並んで大衆投資家層が株式の購入主体として新しく登場している。また日本でも最近話題となっている投資信託が注目を浴びるようになったのもこの時期であり、大衆が株式市場に参入するのに一役買っていた。アメリカ経済は新時代（New Era）を迎え、「永久の繁栄」が継続すると宣伝され、株式市場は錬金術を駆使した多数の投機家によって賑わうことになる。

歴史を振り返ると「なんと馬鹿なことを」と思うことも、時代特有の雰囲気のなかで平常心を失う、という経験を持つ人が多いと思うが、とりわけ〝make money〟の世界で致富の誘惑に打ち勝つのは容易な技ではない。もちろんなかにはJ・ケネデイのように、28年時点で早くも弱気(Bear)に転じ、巨額のキャピタル・ゲインを稼いでいた少数の人々もいた。ちなみに彼はWASP階層以外から初めて大統領となったJ・F・ケネデイの父であり、ルーズヴェルト政権下で証券市場を監督する初代のSEC長官となったが、人々は〝泥棒のプロに泥棒の取り締まりをさせる〟ようなものだと酷評した。

だが多くの人は株価がさらに上がるだろうと言う楽観的雰囲気(Bull)に支配され、売り時を失ったまま、10月24日（暗黒の木曜日）を迎えることになる。29年株式恐慌では、零細な大衆投資家だけではなく、企業の内部情報に詳しいインサイダーといわれる株式のプロもそうした崩壊の渦に巻き込まれ、高い代償を支払わされた。

アメリカの旧世代にとり歴史の分水嶺は労働力人口の1/4にあたる1400万人が失業した29年大恐慌であり、株式崩壊はその象徴であった。だが現代のアメリカでは株式恐慌の非惨さを経験した人は数少なくなり、戦後生まれのベビー・ブーマー世代が退職後の生活資金を確保するため年金基金、投資信託を媒介にして株式市場に大きく関与しており（家計貯蓄の1/2を株式で保有）、そのことが高株価（1万ドル近辺）を演出している。歴史は繰り返されるのであろうか？

＜参考文献＞

・J・K・ガルブレイス著・牧野昇監訳『大恐慌』徳間文庫、1998年

・G・トマス／M・モーガン＝ウイッツ著・常磐新平訳『ウオール街の崩壊』上・下、講談社学術文庫、1998年

（こばやし　まさゆき　経済学部教授・貨幣金融論）

著書：小林真之著「株式恐慌とアメリカ証券市場～両大戦間期の「バブル」の発生と崩壊～」北海道大学図書刊行会1998ほか

日本語ルーツ東西探訪（その1）

日本語と英語の間に共通語はあるか

河井　達雄

このテーマでは日本語になっている英語、英語になっている日本語ということでなく、本来日本語として使われている語が、英語の中にもあるのかを問題としている。日本語の祖語、その発生、形成からも共通語がありそうもないように思われる。しかし、日本文や英文を読んでいくうちに、共通語あるいはそれらしきものに出会うと鬼の首でもとったという気分にひたることがある。

これらのいくつかを述べていくうちに、皆さんは「ああ、そうなのか」と合点されることもあろう。その昔、アーリァ語系の言葉が、サンスクリット語やパーリ語として宗教語となり海や陸を伝わり、主として中国で漢音表記されて日本に渡ってきたものである。

「旦那（だんな）」は、今ではご主人とか商人が得意先を呼ぶ語であるが、元々はお布施や喜捨をする篤志家のことである。「お宅の**旦那**、**ドナー**登録されたそうね」は同じ言葉をくり返して言っていることになる。**旦那**と**ドナー**は同一語源であると言うと「えーっ！」と答える人がいる。「**ドナー**」は臓器提供者のこと、〝kidney donor〟は**腎臓ドナー**である。

「**閼伽**（あか）」徒然草の第十一段に「木の葉に埋もるる懸樋（かけひ）のしずくならでは、つゆおとなふものなし。**閼伽**棚に菊、紅葉など折り散したる、さすがに住む人のあればなるまし」とある。いまでも船底に溜った水のことを**淦**（あか）といっている。東京湾の下を潜る近代科学の粋を集めた「**アクアライン**」の**アクア**と徒然草の**閼伽**と同一語だといったら卜部（うらべ）兼好さんはびっくりするに違いない。aqua（水）、aqualung、aqueduct（水道橋）、aquarium（水族館）、Aquarius（水瓶座）は兄弟語である。

「**波羅密**」は般若心経（はんにゃしんぎょう）に出てくる誰にでもよく知られる語である。京都の六**波羅密**寺もそこから抽き出された寺名である。「**波羅密多**」も同じ意である。最高、崇高という意である。日本ではお経になったが、ヨーロッパでは、ラテン語、フランス古語、アングロフレンチ（英仏語）に変遷し、**パラマウント**〝paramount〟になったのだから愉快である。いま、**パラマウント**映画を見ながら般若心経のことなど考える人は全くありえないことだろう。

「**馬鹿**」サンスクリット語の、若い、幼いは bāla であり、これが「**馬鹿**」になったという説があるが未確定説である。もしそうであると「**馬鹿**」と〝fool〟は親戚以上の関係になることになる。ただし辞書では、「**馬鹿**」は梵語 Moha から由来していると記してある。

「**名前**」も英語〝name〟とそっくりである。パーリ語（古代・中世インド仏語）では nama である。現代ヒンドゥー語では nam である。**名前**、name、nama、nam は共通語と考えてよい。

「**葡萄**（ぶどう）」はペルシァ語がその源とされている。「**ぶどう**」と「**びた**」「**ヴィタ**」とは似た音がある。「**ぶどう**」はヨーロッパに渡って、栄養価のある活力の源となる〝vitality〟、〝vitamin〟となった。〝vitaceous〟は「**ぶどう科の**」と、意味が残っている。

「**波薐草**（ほうれんそう）」は唐名で、ネパールの地名と辞書にあるが、ペルシァの唐音表記ではないかと思うのである。ペルシァ原産の野菜を唐の国に持って来たのを発音通りに表記したのであるとすると、「**ほうれんそう**」は〝Persian〟と同音異義語で、ほうれん草喰いのポパイザセィラマンに知らせたいものだ。

本題から多少ずれるが、「**背広**」「**簿記**」「**ズロース**」「**ラムネ**」は英語から借用されたものと気がついている人が少ないので、時折り説明して、びっくりさせることがあるので面白い。

（かわい　たつお　元北海高等学校教諭・TOEIC インストラクター・元 HBC ラジオ「ワンポイントイングリッシュ」講師）

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.21　No.1（通巻 149 号）
本館　〒062-8605　札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号　工学部図書室　〒064-0926　札幌市中央区南 26 条西 11 丁目
☎（011）841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード